

創建 1200 年記念特別展「神護寺—空海と真言密教のはじまり」

東京国立博物館（上野公園） 24. 07. 17～09. 08 会期中に展示替え

本展は、京都・高雄山に位置する神護寺創建 1200 年、空海生誕 1250 年を記念して開催される催事で、御本尊の国宝《薬師如来立像》をはじめとする真言密教の至宝「およそ 100 件」が終結して約 50 年ぶりに開催される。

神護寺には、国宝 17 点、重要文化財 2833 点が収蔵されているが、これらの霊宝は、明治以降大半の絵画、古文書を東京、京都、奈良の国立博物館に分散して寄託しており、一堂に会する機会はほとんどなかったとされている

本展の開催意義は、「神風の宣場」：国宝《両界曼荼羅（高雄曼荼羅）》などを通じて、弘法大の御教えを感じる。



《薬師如来立像》 木造素地 像高 170.6cm 奈良～平安時代 国宝

如来立像は、高く秀出た眉、うねって伸びる上瞼の下に光る鋭い目、への字に曲げた突き出る唇、大粒で先が尖って見るからにいらだったような貝殻のような粒を並べた髪は、誰もが恐るべき容貌を排して慄然とする。

一木（いちぼく）造りで、眼、唇、螺髪（らほつ）以外には彩色を施さない像で、激しく意志的な面相にふさわしく、その体軀は圧倒的な量感で、頬や両足には荒いのみあとさえ残して、衲衣（のうえ）の先端は柔らかかに翻る新しい平安の類まれな仏像である。

《山水屏風》 国宝 鎌倉時代 絹本著色 各扇 110.8 x 37.5cm 部分

密教の灌頂において会場（えじょう）を飾った屏風で、仏教荘厳具であるが絵に宗教的題材が見当たらず、表現もあくまでも「大和絵」である。

これは、平安時代後期に貴族の結縁（けちえん）灌頂が盛んとなり、世俗的調度品の屏風を会場荘厳品としたことによるという。ただ、本作の場合、霧の立ち込める山々、収穫物を運ぶ人馬、水辺に遊ぶ雁など、一見して秋の風景を表して、そこに仏教的無常観を合意した可能性もなくはない。